

平成 30 年度海外教育(特別)(実践)研究 B

報告書

(2019. 3. 3~3. 17)



上越教育大学

Joetsu University of Education

Contents

平成30年度 海外教育(特別)(実践)研究 B(アメリカ) 日程表……1

平成30年度 海外教育(特別)(実践)研究 B(アメリカ) 参加者名……2
及び引率者名簿

参加学生報告書……3

参加引率教員報告書……40

平成30年度 海外教育（特別）（実践）研究B（アメリカ） 日程表

期 間 : 平成31年 3月 3日 ~ 平成31年 3月17日 (14日間)

目 的 地 : アメリカ合衆国 アイオワ・シティおよびロサンジェルス

日 程 :

日次	月日(曜)	発着地	現地時間	交通機関	用務先 宿泊地名等
1	3月3日(日)	上越 →東京 羽田空港 →ロサンジェルス	19:20発 12:47着	JR DL#006	
2-6	3月4日(月) ~ 3月9日(土)	WISH Charter School			[ロサンジェルス泊]
7	3月10日(日)	ロサンジェルス →ミネアポリス ミネアポリス →シーダー・ラビッツ →アイオワ・シティ	8:45発 14:23着 15:55発 17:13着	DL#2116 DL#3809	[アイオワ・シティ泊]
8-12	3月11日(月) ~ 3月15日(金)	University of Iowa Alexander ES Northwest JHS Garner ES Southeast JHS			[アイオワ・シティ泊]
13	3月16日(土)	シーダー・ラビッツ →ミネアポリス ミネアポリス	6:45発 8:05着 12:24発	DL#4687 DL#121	
14	3月17日(日)	→羽田空港 東京 →上越	14:51着	DL#121 JR	

H30年度 海外教育(特別)(実践)研究B 「アメリカ」参加者及び引率者名簿

☆参加学生名簿

班	学籍番号	氏名	所属
1	302038L	岸下 未侑	-
	292125A	平林 美鈴	幼児教育コース
	305455P	林 美菜子	芸術系教育実践コース(音楽)
2	292007H	飯田 美々	言語系教育実践コース(英語)
	292107C	中山 優香	教職デザインコース
3	292127J	福島 未歩子	臨床心理学コース
	292121K	樋口 りか	学校臨床コース
	305005P	鶴野 賢介	グローバル・ICT・学習研究コース
4	302143B	森田 康哉	-
	292140F	松島 理恵	自然系教育実践コース(理科)
	305322k	宮島 淳人	言語系教育実践コース(英語)

☆引率教員名簿

教員氏名	所属
五十嵐 透子	臨床心理学コース
松尾 大介	芸術系教育実践コース(芸術)

海外教育研究 B 報告書

学部 1 年

岸下未侑

アメリカの学校

私は、実際に英語をたくさん話すこととアメリカの教育現場を見ることを目的に、このプログラムに参加しました。2 週間にわたってロサンゼルスとアイオワに行きました。ロサンゼルスは暖かく半袖で過ごせそうでしたが、アイオワは上越よりも寒かったです。

アメリカの学校を見学し一番驚いたことは、特別支援の子が可能な限り通常学級で授業を受けていたということです。そこには、授業をする教師と特別支援の子のサポート教師がいました。授業をする教師は授業をし、通常の子に教えることも、特別支援の子に教えることもあります。サポート教師は、特別支援の子だけをみる教師です。教材は、特別支援の子供がどういった障害を持っているのかに合わせて、工夫されていました。日本では、通常学級と特別支援学級に分かれているからです。アメリカのように同じ教室に当たり前について、一緒に授業を受けるとなるとそれだけでまた特別支援者という人への感じ方が変わってくるのかなと感じました。

日本の学校では、授業中勝手に飲食してはいけないし、立ち歩くこともしてはいけないとかなり規則が厳しいです。アメリカの学校は、お菓子を食べながら授業を受けたり、寝っ転がって問題を解いたりと自由でした。例えば、寝っ転がって問題を解く生徒は、一見だらだらしているように見えます。しかし日本の生徒と同じように真剣に問題に取り組んでいました。アメリカの自由な環境は、生徒が持つ能力を存分に発揮できるようにするための環境づくりなのかなと感じました。この自由な風潮は学校や先生によって異なるよ



うで、ロサンゼルスとアイオワの学校また、同じ学校でも先生によって、授業の雰囲気が

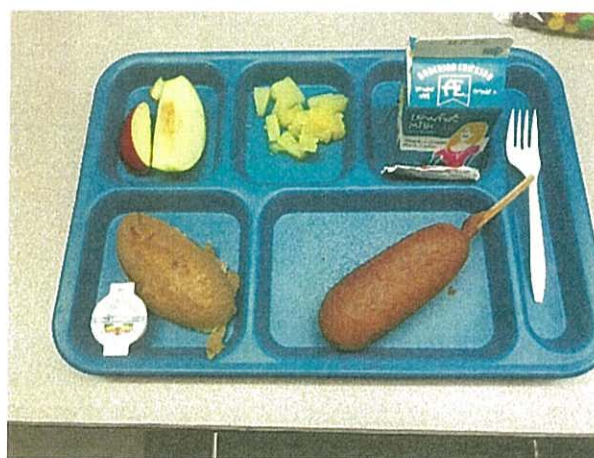
かなり異なりました。

アメリカの学校は最新技術を駆使して教育を行っているなという印象を受けました。プレゼンテーションの設備はすべてのクラスにあり、1人に1台iPadがあるクラスもありました。iPadでは、クラスでGoogle classroomを利用して、画像の共有をしたり、指定された算数ゲームで算数の勉強に取り組んだりしていました。もちろんこの上越教育大学でもGoogle classroomを利用していますが、私たちは大学生です。アメリカでは、小学校低学年の子供達が、楽々と操作をしていて驚きました。低学年のクラスでは、スクリーンの前にカーペットが敷かれておりそこに生徒達が座って教師のお話を聞くという姿が何度も見られました。

学校全体での目標や決まり事があることやクラスでそのクラスでの決まり事があるところは、日本と同じだなと感じました。その決まり事や目標はすべてのクラスに掲示されていました。“CHAMP”という学校での決まり事には、規則というよりも授業は人との関りで完成するというのを伝えているのかなと思いました。



アイオワの小学校では、給食を食べさせていただきました。メインメニューは決まっています渡されるが、残りは自分でよそうというスタイルでした。給食当番はありませんでした。そして教室で食べるのではなく、ランチルームで食べるということでした。ランチルームには、全生徒は入らないので、学年によって昼食の時間が異なるそうです。日本のように全員で一斉に昼食の時間にならないことに驚きました。ランチルームの床には、食べ物のカスや、



牛乳がこぼされていました。それを片付けるのは、汚した本人ではなく清掃業者の人たちでした。こういうところも少しずつ日本と異なっているのだなと感じました。

ロサンゼルスの子校の反省会では、その日行った授業の S (success) C (challenge) A (action) の3つについて各クラスの教師が話し、それを共有していました。3つについて話しているとき、こうすればもっとよいのではないかなどという案が積極的に出てきていました。消極的なことではなく、良い点と努力した点を探すというのは、気持ちが明るくなりよいなと思いました。

私は低学年を対象とした班でした。授業では福笑いをすることになりました。まず限られた時間の中で何のために福笑いを教えるのかという

‘目的’に沿って授業を作り上げていくのが大変でした。アメリカへ行き、授業をする前にそのクラスの担当教師と打合せすることができました。その時に気になることは質問しておくことで、不安な気持ちを持たずに本番の授業に挑むことができました。サポートして欲しいことは、しっかりと伝えておくことが重要です。授業する際には、英語を丸暗記し話すのではなく、しっかりと意味を理解した上で話すことが大切だと思いました。練



習では何回でも言えたスクリプトは、丸暗記で話しているだけでした。そのまま本番の授業に挑むと、予想外の質問に答えられないし、内容が生徒に伝わりにくかったです。英語の内容を理解できるようになってからは、英語がスラスラと出てきたし、授業で自分に余裕ができ何倍も楽しめました。どこの国でも変わらず教育者として、当たり前ですが教える子供たちに恥ずかしくない授業準備と練習が必要だと思いました。そのことをこの学部1年という早い段階で気づけてよかったです。

海外教育研究 B を振り返って

幼児教育コース 学部 2 年

平林美鈴

・アメリカと日本の教育の比較

今回の研修では、三校の学校に行く機会があった。学校で印象に残ったこと、驚いたこと、日本との文化の違いを感じたことを以下に書こうと思う。

始めに行った学校はロサンゼルス为学校である。ここでは特別な支援が必要な子どもと一緒に他の子どもと同じ授業を同じように受けていた。担任の先生の他に特別な支援が必要な子どもに個別で先生が一人ついていて、子どもが授業についていけるように支援していた。支援の道具としてホワイトボード、感情が描かれた表など日本でも使われているものから、iPad や言葉のアプリなど初めて見たものがあった。「どの子どもも同じように授業を受けるべきだ」という考えが深く浸透していることを感じた。

三校目の学校では、アメリカの教育現場と日本の違いを特に感じた。一日目は観察ということで、二年生のクラスに入って一日一緒に活動した。教室に入って驚いたことは、授業中（一人ひとりパソコンで課題を行う）にもかかわらず、子どもが寝転がったりソファに座ったりしてパソコンを操作していたことである。先生には「自由に観察してください。ソファに座ってでも、寝転がっても、椅子に座っても何でもいいですよ。今日一日このクラスを楽しんで！」と言われた。子どもは自由に意見を交換しながら課題に取り組んでおり、先生はできたかどうかの確認や質問に答えていて、子どもたちが主体的に自由に楽しみながら課題をしていた。アメリカの教育現場では自由や主体性、そして楽しむということを大切にしているということを感じた。

・Teaching Practice に対する振り返り

自分たちの Teaching Practice を振り返ってみると、毎回の授業で見つけた課題を次の授業で改善できたことが多かったと感じる。ここでいくつか例を挙げようと思う。私たちの班は福笑いをテーマとした授業を準備した。三人グループになり福笑いを一人ずつ完成さ

せること（ラミネートした顔の絵を使い、両面テープのついた顔のパーツを貼っていく）が授業の主な活動であった。一人の子どもが福笑いを完成させたら次の子どもに福笑いのセットを渡し、次の子どもが福笑いを始める、という流れで行った。最初は、私たちの「スタート」という合図で、一番目の子どもは一斉に福笑いを始め、「ストップ」の合図で止めて、次の二番目の子どもが福笑いの用意をし始める、というようにクラス全体で福笑いの始めと終わりを合わせるような計画で授業を進めていた。しかし、授業をした対象年齢が五〜七歳ということもあり、子どもたちは他の班が終わるのを待つことができなかったり、その間に顔のパーツをはがして再度福笑いをやろうとしまったり、他の遊びを始めたりということがあった。これを踏まえ、クラス全体で一斉に福笑いを行うのではなく、班ごと進めることで子どもたちが手持ち無沙汰になる時間を減らした。また完成させた福笑いは裏返しにして机のはじにおいておくこと、また最後にそれを持ちクラス全員で写真を撮ることを伝えたことで、顔のパーツをはがす子どもはいなくなった。なぜそうするのかを具体的に伝えることで今回授業を行った最年少のクラスである五歳クラスの子どものもしっかりとその行動の意味を理解してくれた。

私たちの班で一番問題になったことは、時間配分である。授業時間を延長することはできないことを想定し、時間内で終わるように授業を構成して実践に臨んだ。しかし最初の授業実践では、慣れない英語で授業をすること、上にも書いたような大学の事前の講義内では想定しなかった子どもたちの行動や反応などにより、時間が足りなかった。何とか福笑いを完成させることができて、子ども達がそれぞれ作った福笑いを持ち写真を撮ることができなったり、福笑いをする時間を十分にとることができなったりした。そこで、細かく時間配分決め、授業の流れをより明確にした。また事前に担任の先生と打ち合わせをして授業の流れを分かってもらうことにより、スムーズに授業が進ませることができたと感じる。

授業実践を通して成長したと感じたことは、子どもの反応を見ながら授業を進められたことである。今回、三校の学校、三学年で授業をする機会があり、それぞれの学校、学年、クラスにより子どもたちの授業に対する反応、取り組み方は違うと感じた。しかし、私たちがそのクラスで授業を行う機会は一回きりで、その四十五分という短い授業の中でそのク

ラスの子どもたちはどんな子どもたちなのか、さらに日本の遊びである福笑いにどうすれば興味を持ってもらえるかなどを考えながら授業を進めなくてはならなかった。そんな中、私は子どもたちの反応に注目しながら授業を進めることを意識していた。たとえ英語での会話がうまく成立しなくても、子どもたちの反応を意識することで理解しているのか、楽しんでいるのか、何に困っているのか、何をしたいのかがわかった。これは、アメリカに限らず、日本の学校でも同じことが言えると思う。授業をその通り進めることは大切だが、子どもがその内容を理解しているのか、その授業をどう感じているかを教師が把握することは大切である。当たり前のことであるが、授業は子どもが中心で自発的に活動する場面である。それを支援するための教師の一つの方法として、授業中に子どもの反応に注目することの大切さを改めて感じた。





アメリカの教育に触れて

所属 教科領域教育専攻 芸術系教育実践コース（音楽）

氏名 林 美菜子

●はじめに

私はこれまで台湾やフィリピン、カンボジアといったアジア圏での教育現場に触れてきた。そこで、これまで体験したことのないアメリカでの教育に触れたいと思い、今回の研修に参加することを決めた。

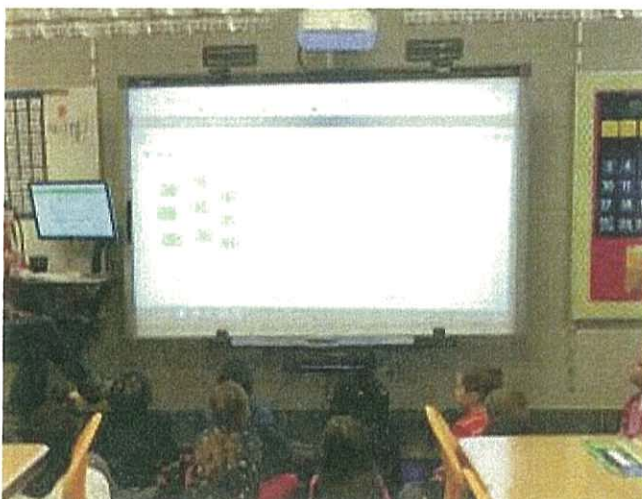
たったの2週間ではあったが、10回の授業実践や、授業参観、子どもたちとの関わりの中で非常に濃密で貴重な体験をさせてもらった。

そこで、学んだことや感じたこと、伝えたいことなどを述べようと思う。

●アメリカの教育現場に触れて

私の担当の児童は、低学年（Kinder～2nd）だったため、他の学年のスタイルとは異なるかもしれないことをここで断っておく。

クラスに参加してまず驚いたのは、全部の学校に電子黒板や実物投影機などの ICT 器具が設置してあるということである。日本にも多くは取り入れられてはきているが、実際に使用する場面は少ないのではないだろうか。



アメリカでは基本的に電子黒板を使用して授業が行われており、教師が板書する場面は少なく、子供たちもノートを取るという場面はあまり見られなかった。また、一人一台パソコンや iPad を所有しているということにも驚いた。

ログインシステムが、QRコードを読み取らせるだけという低学年にも触れやすいシステムを取り入れているとか、ゲームをするだけで勉強になるソフトが入っているとか、子供たちが簡単に・楽しく学ぶシステムが構築されていることに感銘を受けた。さらに決定的に異なると感じたのは授業を受ける子供たちのスタイルである。

寝そべっても、机の下にいても、子供たちが集中して取り組むことができるのならどのような姿勢でいてもいいのだ。クラスによっては、ソファが置いてあったり、クッションがおいてあったりして、子供たちがリラックスして授業に取り組むことができる学習環境作りがなされていた。

このように、子どもたちが授業に飽きないような工夫がなされており、どの授業にも集中して取り組む姿勢が見られた。



その他にも1日の流れがホワイトボードに書かれており、予定を視覚化することによってどのような児童も1日の流れを把握できるような支援がなされていた。これは毎朝担任の先生が書き込んでいるという。また、感情分布図に自分の今日の感情を毎朝子供達に置きせることで、子供たち自身が自分の感情をメタ認知することができるような工夫がされていた。

日本の特別支援学校で行なっているような支援を、アメリカでは日常的に取り入れており、学習環境だけではなく、学校生活を送る上で快適に過ごすために様々な支援がされていることにとても驚いた。



●授業実践をして

私たちのグループは「福笑い」の授業を行った。授業実践はロサンゼルスとアイオワで10回行ったが、特に大切だったと感じた点は2点ある。

まず1点目に、ボキャブラリーを増やすことである。

授業自体は1年間を通して計画、練習を行ってきたため、特に英語で話すことには支障がなかったが、実際に授業をすると、とっさに子供たちを褒める、注意すると行った場面の声かけができない場面が多々あった。そのために、褒め言葉のパターンを増やしたり、注意したい項目をリストアップしたりするなどして改善を行い、次からの授業に取り組んだ。すると、授業を通して子供達と対話することが可能となり、子供達の反応や授業に取り組む姿勢も変化したように思えた。そうすると、私たちも楽しんで授業することができ、最後の授業を終えた時、達成感を感じることができた。ぜひ、次回の海外教育研究に参加しようと思いこのレポートを読んでいる人には「褒め言葉」「注意」のボキャブラリーを増やすことに取り組んでもらいたい。

2点目に、自分のことを褒める視点を持つことである。

ロサンゼルスで授業実践を行なった後、授業後のミーティングに参加させてもらう機会があった。そこではその日に①Success（成功したこと）それを踏まえて②Challenge（取り組みたいこと）そのために③Action（何をするか）を各先生が発表する場であった。私たちは授業が終わるたびに、「ここをもっと頑張れた」「ここが失敗してしまった」とネガティブな感想を抱いていた。授業を改善するために、努力できた点や失敗した点を見つければいけないと考えていたからだ。だが、そうではなく「ここが成功できた」と発表する先生方の姿を見て、私たちがネガティブに考えていたことに気づくことができた。また、先生方からも授業を褒めてもらい自信となったことで、私たち自身も楽しんで授業を行うことができた。

このように自分を褒める視点を見つけ出すことで、前向きに授業に取り組む姿勢ができ、最終的に後悔の無い授業を行うことができたと思えるようになった。

●最後に

学習形態や環境、考え方などに差異はあれども、子供たちと関わって一番感じたのは、どの国の子供たちも変わらないということである。楽しそうに授業に取り組む子供たちの瞳は輝いているし、喧嘩をしたら泣いてしまうし、全力で走り回って遊ぶ姿はイキイキとされていて、全く日本の子供たちと大差がなかった。だからこそ、違う国の子供だから、言語や人種が違うから、障害があるから、といった理由で無意識のうちに壁を作ってはいけない。私たちはどのような子供に対しても真剣に向き合っていかなければいけないのだ。

最後に、アメリカでドラえもんはメジャーなキャラクターでは無いということをもみんなには覚えていてもらいたい。(でもポピュラーになって欲しい)

海外教育研究 B を終えて

学部 2 年 英語コース

飯田 美々

授業実践から学んだこと

私たちのグループは、「ソーラン節」を踊りながら日本の文化に親しんでもらおうというねらいで授業づくりをした。今までそれほど授業者としての経験がない私は、今回の授業づくり・授業実践を通して成長することができたと思う。また、将来の教職に向けて自分なりに課題を見つけることができた。

まずは、授業づくりは授業を受ける子どもたちの立場になって考えることが基本であるということを学んだ。子どもたちに「ソーラン節」の振り付けを教える際に、どのようにすれば分かりやすいかということや、「ソーラン節」の起源である鯨漁の紹介をする際に、子どもたちが飽きないようにするにはどうすれば良いのかなどということを何度も考えて工夫した。このような経験を通して、子どもたちのための授業をつくることの意義を理解することができた。また、子どもたちに正確な情報を伝えるためには、様々な手段を使って情報収集をすることが重要であるということも学んだ。鯨漁についてほとんど知識のなかった私たちは、実際に鯨漁が行われていた北海道の役所などに問い合わせたり、鯨漁の写真や映像をいくつも集めたりした。教師として、授業をする前には様々な準備が必要であるということがわかった。

そして実際、アメリカの子どもたちに対して授業をしてみて、自分はまだ授業者として力が足りないと感じた。例えば、子どもたちの前で話すときの声の大きさや表情、ジェスチャーなど、頭ではわかっているがなかなかうまく実践することができなかった。また、自分の英語力のなさを痛感した。子どもたちが質問してくれたり感想を言ってくれたりしても、すぐに英語で返答することができず、何度も自分を悔やんだ。これらのことから、将来教師になる者として、何度も授業をすることで練習を重ねて授業力を身に付け、英語力を向上させることが今後の私の課題であるということに気付くことができた。

アメリカと日本の教育の比較

アメリカと日本の小学校を比較してみて、アメリカの教育の特徴について特に2つ印象に残ったものがある。まず1つ目は、障害のある子とない子が同じ教室で学習しているということである。また、授業中に障害のある子が大きな声を出したり机を叩いたりしても、他の子どもたちは気にすることなくそのまま授業に参加していた。私はこの授業風景を見て、これが本当のインクルーシブな教育であると確信し、私もこのような教育をしたいと思った。日本の小学校では、障害のある子はほとんど特別支援の教室で過ごすことが多い。確かに、子どもたちの能力に応じ、場を分けて特別支援教育をすることは大切であるかもしれない。しかし私は、子どもたち一人ひとりの可能性を大切にするために、みんなが同じ場で共に学ぶことにこそ意味があると考えます。障害のある人とない人が共生する社会をつくり上げるためには、日本の教育から変えていかなければならないのだ。日本でのインクルーシブな教育をもう一度見直す必要があるのではないかと思った。

2つ目は、1つの授業の中で様々な学習方法が組み込まれているということである。日本の小学校の授業では、一人ひとり席に座り、みんな同じことを一斉にするというのが典型的だが、アメリカの小学校は全く異なっていた。例えば、分数の授業で、ワークを使って文章題を解いている子もいれば、絵・図で分数の定義を学んでいる子、iPadを使って分数のゲームをしている子など、子どもたちが様々な方法で学習をしていた。日々の授業が固定化されて子どもたちが飽きないようにするために、このように様々な学習方法を組み込むことは良い方法だと思った。一方で、子どもたち一人ひとりに目が行き届きにくくなるため、普段よりも教師の配慮が必要になるだろう。

私は、アメリカに行くまでは、アメリカの小学校はとにかく日本よりも自由なんだろうと思っていた。しかし、日本のように細かいルールが決められているのを見つけ、やはり教育にはルール・きまりが必要であるのだなということを感じた。廊下の歩き方は廊下の壁に、授業の受け方に関することは教室の壁に掲示してあり、子どもたちが自らいつでもルールを意識できるように工夫されているなどと思った。



アメリカで生活してみる

今回アメリカで生活し、最も感じたのは人と人のつながりである。学校の先生方・子どもたち、ホストファミリー、タクシー運転手さん、お店の店員さんなど、現地の方々は私たちにフレンドリーに接してくれた。外国人である私たちを優しく迎え入れてくれたのだ。

ホームステイでは、家族のつながりを感じることができた。私を迎えてくれた3人家族はとても仲が良く、中学生の子がお母さんに学校であったことを話したり、お父さんに宿題を教えてもらったりしているのを見て、家族っていいなと改めて感じた。また、アメリカの人たちは、ご近所や職場、イベントなど様々なところで人とのつながりを大切にしているのだなと思った。私自身、人とのつながりを感じる度に温かい気持ちになった。

近年、日本では人とのつながりが希薄化している。隣に住んでいる人の名前や顔を知らないというのも稀ではない。しかし私は、人とのつながりは生きていく上で重要だと考える。なぜなら、誰かと関わりを持つことで、自分の世界を広げることができると思うからだ。

このことから日本でも、人とのコミュニケーションの重要性をもっと唱えるべきだと考える。そして、教育の中でも、子どもたち同士の関わり、子どもと教師の関わり、学校と家庭の関わりなど、様々なつながりを大切にすべきである。しかし今の私は、他人とのかわりを拒もうとすることがあるから、今回のアメリカでの生活を生かし、これからは積極的に様々な人と関わりを持ってみたいと考えている。

海外教育研修を噛み締めて

学部2年 教職デザインコース

中山優香

はじめに

私がこの海外教育研修Bを履修した理由は、たくさんの人と関わってたくさんの考えに触れ、自分を高められたから。そして、日本の文化に触れることによって外の世界を見ることによって、より日本を好きになりたかったからだった。2週間を通して、私はこの目標を達成できたと感じる。ここには、この授業の事前準備から実際のアメリカでの2週間の生活を通して、教育や文化に触れ、感じたことやそこから考えたことについて述べる。

伝えるということ

私たちの班は、ソーラン節についての授業をした。準備をする中で、ネットに掲載されている情報や身近にある本だけではなかなか授業を構成できず、とても苦戦した。北海道のソーラン節のもとになったニシン漁に詳しい学芸員さんや、さまざまな役場の方のお力を借りて、歴史や仕組みを学んだ。学ぶ中で、さまざまな人の頑張りや歴史の中でソーラン節が生まれ、踊りもつけられたのだとわかり、なんだかたくさんの方のエネルギーを感じた。それらの得た知識をもとに授業を組み立てていったが、どこまでこのソーラン節の歴史やニシン漁を紹介するのか、踊りの教え方や全部踊るのか、など次から次へと課題が出て来て、知識があるだけでは授業はできないものだと感じた。ただ小学校の中学年向けの授業を作ればよいというわけではなく、言語や文化が異なる子どもに対しての授業を考えるということで、自分が持っている授業観を見直すことが求められた。試行錯誤をし、進め方や活動の提示の仕方を工夫し、何をこの授業でやるのかということが明瞭になるように骨組みを作った。そこに、ソーラン節の名前の由来や歴史の知識を言葉にして織り込んだ。最後の日本での海外研修の授業のとき、これで授業はバッチリで完成したと思って

いたが、いざ子どもを目の前にすると思っていた反応と異なり、本当に授業内容が伝わっているのか、そして私たちは何を伝えたいのかを見直した。どの単語ならば、どの言い回しならば私たちが伝えたい気持ちをそのまま受け取ってもらえるのだろうか、授業を重ねるにつれて見直すことが増え、飯田さんとああでもない、こうでもないと言いながら改良した。それらの努力が功を奏し、最後の授業では、たまたま見に来られた校長先生に褒めていただき嬉しかった。授業を作り上げて、「伝えること」の難しさを痛感した。本当に伝えるために、たくさんの言葉を持ってさまざまな言葉で表せるようにすることが必要だと思った。単語1つで、文章1つで、子どもの理解度が変わり、わかる授業になる。改めて、言葉の力を感じ、子どもにわかりやすい素敵な言葉の使い方をこれからしていきたい。

アーミッシュの存在

アーミッシュという存在を、話を聞くまで知らなかった。少し事前に調べた知識をもとに、ワンピースやキルトの展示、馬車や学校、牧場を見学した。アーミッシュを実際に見て、生き方についてとても考えさせられた。正直、まだ頭では理解していても気持ちが



ついていかず、自分の中ではまだ理解できていないところが多い。「昔の暮らしを守り続け、そのコミュニティの中で生きる」という生き方をしている人がいるのかという事実に、驚きだけでなくさまざまな言い表せない感情が湧いてきた。その暮らしは幸せなのかということがまず頭をよぎった。別に、私が彼らの生き方を評価して幸せなのかを判断する立場ではないが、外の世界を知らずに、というか、生き方が自由でないという言いすぎですが、生き方が決められているということは、私は悲しいと感じた。幸せとは何なの

だろう？と考えた。生きている地が、周りにいる人が、どんな生活環境なのかが異なれば何が幸せなのかも、人それぞれ異なるものだし、何が本当に「いいこと」なのかも考えさせられた。今見ているもの、学んでいること、まだまだたくさんの知らないことが自分の身の回りにあるが、それを全て知った方が幸せなのか、そうでないのか。考えていくうちに、自分は正しいとか間違っているということにとっても囚われていることがわかった。みんなが納得する正解などないし、自分がいいと思う、幸せと思うことを望んで生きればいいのだと感じた。



まとめ

上に書いた出来事以外にも、日本でもアメリカでもたくさんの人との出会いがあり、その出会いがこの研修の目標達成に繋がった。言葉で伝える難しさ、アーミッシュの文化以外にも、たくさんの出来事が今の私を作っている。この研修での思い出も時間もすべて噛み締めることができたと思う。すべての出会いに感謝を、そしてさらなる飛躍を。

日本とアメリカにおける教員の充実性と大学進学に対する意識の相違について

臨床心理学コース2年 福島未歩子

(1) アメリカと日本の教育の比較

はじめに、私がこの海外教育研究Bの授業に参加した目的として、学部2年になったことで、基礎的ではあるのですが、ようやく志望していた心理の勉強も学びはじめていた私は、将来スクールカウンセラーとして教育に携わりたいと考えていたということがありました。特に私は、児童・生徒や保護者だけでなく、教師のサポートもすることができるスクールカウンセラーになることを目標としています。そのためには、日本の教育事情だけではなく、第三者の視点を養うためにも、日本よりも教育の制度も体制も圧倒的に進んでいるアメリカの教育現場から教師と子どもたちの関係や教師の役割はどのようなのかについて、とても関心を持つようになり、いっそうこの授業に参加する目的が明確化していました。以上のことから、今後自分の将来や日本の教育現場に役立てるように、アメリカの教育方法や学校体制を学ぶことを特にこの授業の目的として、私は取り組んできました。

実際に、2週間の海外教育研修に行ってみた感想としては、驚かされることばかりでした。まず、最初の授業校であるWISH charter schoolでは、最先端で高レベルの教育と優れた教育体制を見ることができました。実際の授業を観察してみて、学年ごとそれぞれ一つひとつの授業から学ぶ目的がはっきり明確化していることが分かりました。低学年で“W”という文字を学ぶためにただ書くのではなく、レゴや木のブロックで作ったり絵を描いたりして習う方法を用い、低学年であることも考慮し短い時間でローテーションさせるという活動をしていたことや、他の学年では算数の授業でお金の数え方や計算を習う演習の前に、先生が物語の役になりきって子どもたちの興味を引き出していたことなどがとても工夫された授業だと思いました。ひとつのことを“学ぶ”ということに対する考え方の深さと先生方の創意工夫が、子どもたちにとっての“よい授業”になっていくのだと思いました。ただ、これには1クラスに担任だけでなく、必ずもう一人サポートの人がいるというアメリカの学校体制がしっかりできていることが大前提にあると思います。この研修を通して、私が一

番日本との違いで感じたことが、教師が負担しなければならない仕事量の差でした。日本では児童が帰ってからも仕事を学校でしている一方で、アメリカではほとんど児童と同じ時間帯に帰っていたことにとっても驚きました。日々の授業の準備などをいつしているのかを聞くことができなかつたので、その点に関しては未だに疑問が残っているところです。また、WISH では、特に教師間の連携やコミュニケーションが徹底されている様子が、実際に一日の終わりのミーティングに参加させてもらったことで目にすることができました。ここでも日本との違いがありました。それは、先生方の反省が自分の一日を振り返っての課題と次への目標を一人ずつ言っていくというスタイルだったことです。日本では子どもたちのことや業務連絡を主にしている印象ですが、WISH のように自分はどう思っているのかを他の先生に意思表示できる場があることが、お互いに助け合うことにつながる一歩になっていくのだと思いました。ひとりで悩みを抱え込まないようにする機会を少しだけでも設けることは、日本の教師が抱えるストレスの軽減に微力ながら働くのではないかと考えています。ただ、今の日本の教育現場ではこの時間を確保するだけでも大変なくらい教師が仕事だけでなく、児童や保護者への対応に追われていることがやはり大きな問題であると考えようになりました。アメリカに行ったことによって、改めて気づくことができました。

また、私がアメリカでもう一つ驚いたことがあります。それは、アイオワでの 2 校を含め、アメリカのどの小学校でも、ひとり一台のパソコンを小学生のときから活用していることです。よく見てみると、私が大学生になってから授業で使用し始めた Google Classroomなどをアメリカの小学生たちは平然と使っていたのは、日本とアメリカの教育の決定的な差だと痛感しました。それに比例するように、アメリカではどの学校も“大学進学”に対する重視の仕方がとても強いことを知りました。教室や学校の壁など至る所に、大学進学を念頭に置いたメッセージや数字が書かれていて、日本との進学に対する意識の差を感じました。日本は、大学進学がゴールになってしまっているところがある一方で、アメリカは特に大学卒業後の進路まで見据えて、小学校教育があるのだと思いました。このような意識の差も、教育の差に大きく反映していることを行って初めてわかることなのだと思います。



(左：大学進学のを教室の入り口に掲示)

(2) 授業をしてみた感想

半年間かけた自分の授業についての感想は、現地で、担当の先生方をはじめ多くの方々に助けられて、なんとか授業をやり遂げることができたのだと実感したことです。とても満足のいく授業ではなかったうえに、本来自分たちが伝えなかったことや教えたかったことがどこまでアメリカの子どもたちに伝えられたかはわかりませんが、この海外教育研究を通して、自分が教師として成長できたことは、いつも子どもたちを第一に考えて、授業作成に取り組んだことです。授業を重ねるごとに改善策を探し、実際に授業をしてみてわかることがたくさんあることを、身をもって経験しました。私たちの班は、日本の“すする”という文化をアメリカの子どもたちに授業してみて、日本にいたときはアメリカの子どもたちはラーメンをすすって食べないと思っていたことが、実際には多くの子どもたちがすすって食べるということに驚きました。このような予想していなかったことが、実際に授業をしてみると多々起こり、それらに対する反応や進め方を臨機応変にしなければならなかったことはとても大変でした。これは、教育実習でも必ず起こりうることであると思うので、入念な準備が本当に重要であると思いました。

また、授業をする立場になる責任感や影響力をもつことも、身をもって経験することができました。子どもたちはより私たちの授業を真剣に聞いてくれたことに対し、間違っことは絶対に教えるはいけないという緊張感もありました。ただ、日本での実習経験がない中で、

はじめて子どもたちの目の前で授業をすることやそのための準備はとても大変でしたが、子どもたちの反応が引き出せたときの嬉しさは今までの準備が報われたように思えました。

今後、教育実習で子どもたちが興味を持てるような授業づくりをするために、子どもたちに何を学んでほしいのかを私自身の中で明確にしながら、そのために教材・教具準備の大切さを忘れずに、取り組んでいきたいと思います。

海外研修 B 事後報告書

学部 2 年 学校心理コース
樋口りか

【参加するにあたり】

私がこの海外研修 B に参加した理由は二つあります。一つ目は、アメリカの小学校の教育のレベルを知りたかったからです。これまでに私はオーストラリアの小学校・台湾の小学校を見学してきました。どちらの小学校も、あたりまえですが日本とは異なる教育方法で、その国の子供たちにあった教育を行っていました。また、台湾の小学校では英語の授業で私が大学の授業で習った内容を教わっている場面を見ました。その時、日本の教育の遅れを強く感じました。日本の教育に足りていないものは何か、他国の教育現場から学ばなければならないと思いました。なので、今回はアメリカの小学校の教育のレベルを知るために参加しました。

二つ目は、海外の特別支援教育に興味があったからです。アメリカに行く前に、ホームステイ先のお子さんが体に障害を持つ子供だということがわかりました。様々な機器を使って生活しているということを聞いたときに、海外の特別支援教育に興味がわきました。実は、私の通っていた小学校は、日本では珍しい、特別支援学校と併設された小学校でした。カリキュラムの中で、小学校 3・4 年次になるとその特別支援学校の子どもたちの学校生活の支援を行ったり、ともに文化祭で発表を行うなどの共同活動がありました。3・4 年生以外でも、自由に特別支援学校への行き来ができました。そのようにして、障害を持つ子どもたちと共に小学校生活を送ることができました。アメリカの特別支援教育のやり方と、アメリカには、このような小学校はあるのか気になっていました。

【学校見学で印象に残っていることや考えたこと】

- ・ロサンゼルス的小学校で印象に残っていること

ロサンゼルスでは、WISH Charter School という小学校で教育実践を行いました。

WISH の小学校で特に印象に残っているのは、インクルーディング教育です。障害をもつ子どもたちが他の子どもたちと一つの教室で共に学んでいました。障害を持つ子どもには、学生スタッフがつき支援を行っていました。学習内容は、その子どもにあった内容であるため、他の子どもたちと同じ内容をやっている子どももいれば、異なる内容をやっている子どももいました。

私は、障害をもつ子どもたちが他の子どもたちと一つの教室で共に学んでいる姿をみてとても感動しました。WISH の子どもたちは小さいころから障害のある子どもたちと生活してきているため、障害をもつ人のことを理解し、彼らに対して寛容な態度をとることができているのだと思いました。私は町や Twitter などの SNS 上で、障害を持つ人たちに対して偏見を持っている人たちの言動やコメントを見聞きする度に、彼らのことを何も知らないからそんなことが言うことができ、また、彼らのことを何も知らないから偏見が生まれるのだと思います。WISH の高校を見学しているときに、あるクラスで、かなり重度の障害を持つ子どもが授業中に叫んでいた場面がありました。そのとき、他の子どもたちは嫌な顔一つせず、何もなかったように授業を続けて受けていました。何もなかったようにというのは、決して無視とは違うのです。彼らと小さいころから共に生活してきているからこそ、彼らのことを理解しているからこそその態度だと思います。日本だったらどうでしょうか。私がボランティアで通っていた学校では、ほとんどのクラスで、障害を持つ子どもは教室の中で厄介者扱いを受けていました。普段取り出し授業であまり教室にいない子のことを、理解しよう知ろうとしてもどうしても限りがあります。お互いに理解しあえていないからこそ、そのようなことになってしまうのだと思います。そのことから分かる通り、もし障害を持つ子どもが教室の中で叫んでしまったら、もう一大事です。

日本も、WISH のようなインクルーディング教育を取り入れてみるべきなのではないかと思います。特別支援学校などの、障害を持つ子どもたちだけが通う学校がありますが、それは果たして本当に子どもたちにあった、子どもたちのための学校なのだろうかと考えさせられました。

・アイオワの小学校で印象に残っていること

アイオワでは、Alexander Elementary School, Garner Elementary School で教育実践を行いました。アイオワの小学校で特に印象に残っていることは、ICT 教育です。各クラスにタブレット端末とパソコンが導入されていました。

タブレットが使われているのを見たのは、プログラミングの授業と、障害のある子どもの支援道具としてでした。プログラミングの授業では、子どもたちが班に分かれて、レゴブロックを使った機械を組み立てていました。組み立てる際、班ごとにタブレットでその機械の組み立て方に関する動画を見ていました。教員が全員の前で実際に作りながら説明をするよりも、手元に手本があるほうが見やすくいいと思いました。特に、レゴブロックは小さな部品がたくさんあるため、動画を見せたほうが見やすいと思いました。また、子どもたちがそれぞれ自分たちにあったペースで活動を進められます。動画なので、何回も見直すことも、止めることもできます。班によって、止めたいところも見直したいところも違うので、ただ一つのスクリーンに動画を流すよりも、班ごとにタブレットがあるほうが、子どもたちが自発的に活動できるため、より活発な活動が期待できると思いました。

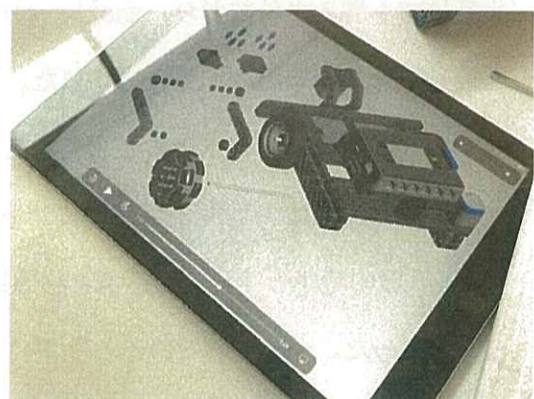
障害のある子どもの支援道具は、画面に普段の生活でよく使う言葉などが表示されており、子どもが自分で言いたい言葉をタップすると、その音声流れるという仕組みでした。日本ではよくカードを使いますが、タブレットがあれば、カードを作る必要もなく、また、カードの角やカードでケガをする心配もありません。

パソコンは、子どもたちが一人一台パソコンを所有していました。授業では、Google Classroom を使用していました。私は大学生になってから Google Classroom を知ったので、アメリカでは小学校から使われていることにとても驚きました。また、子どもたちが楽しく学ぶことができる様々な教育ソフトを使用していました。パソコンを使うことによって、共有したいことをすぐに web 上または、Google Classroom で共有できます。そして、子どもたちと共有したものを、データとして教員が残しておくことができます。紙媒体だと、何枚もの紙をスキャンするか、コピーをとるしかありませんが、保管しておくの

には限りがあります。そのため、パソコン上で課題などを処理するのがいいと思いました。しかし、見学している中で気になった点が二つありました。一つ目は、文字の大きさです。ある子どもが課題で指定された枠の中に感想を打ち込んでいました。その子どもが書きたい量が多かったため、文字の大きさをとても小さくしなければなりませんでした。その文字の大きさが小さすぎてもはや読むことができませんでした。二つ目は、子どもたちのパソコンの使い方です。注意しなければならない点として、子どもたちが授業とは関係ないことを調べたりしていないかなどを把握できるソフトを使用し、きちんと子どもたちの活動内容を把握する必要があると思います。実際に、授業を見学しているときに、授業と関係のないことを調べている子や、他の人たちと明らかに画面の内容が違う子が見られました。そういうところは、やはり注意するべきだと思います。



休み時間



プログラミングの授業 (iPad)

【あしがき】

私は、このアメリカでの研修を通して、日本に足りないことは多く、日本はまだまだこれからだと感じました。上記で述べたこと以外にも、アメリカの教育には興味深いことがたくさんありました。ただ、アメリカで学んだことを日本にそのまま取り入れては意味がなく、日本にあった形に変えて実践することが大切だと思います。将来教員になったならば、ぜひ今まで海外で学んできたことを活かし、子どもたちの教育をより充実したレベルの高い物にしていきたいと思います。

海外教育研究に参加して

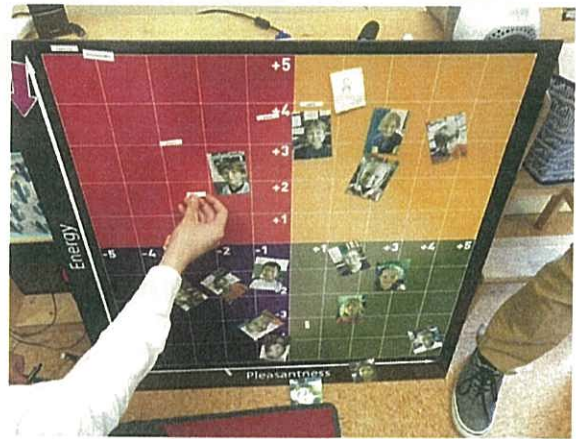
グローバル・ICT・学習研究コースM1

鵜野 賢介

アメリカと日本の教育の比較

アメリカの教育や学校を実際に自分の目で見ることで、日本との教育の違いについて考えるきっかけにつながった。ロサンゼルス Wish Charter Elementary School で最初の教育実践があったが、初日の観察で日本の小学校とは異なり全てが真新しく見えた。校舎の作りも色鮮やかで教室の中にバランスボールやテントがあり、子どもたちの授業を聞く態度が様々で、寝転がり勉強している姿も当たり前のようにいたことに驚いた。また、ICT 機器が小学校でも導入されており、google classroom を使い、ソフトを用いて個人で課題や問題に取り組んでいる場面が見受けられた。その視点から見ると日本の小学校教育の ICT 機器の充実度はかなり遅れていると痛感した。また、教室には、児童一人ずつの顔写真のプレートがあり、感情の理解と自己のコントロールを知るための視覚的にわかる表が置かれていた。5歳の時から1日3回感情と状態について見つめる機会があり、日本にはない特徴の一つであった。一つの例ではあったが、このよ

うな取り組みを幼い時から行なっているため、アメリカの人たちは表情や感情が豊かであるとわかった気がする。他の取り組みとして、目的意識を持ち、学級の中で望ましい行動をすれば、それ相応のコインが得られ、それを活用し創造性を高める活動もあった。さらに、同じ教



室内で障害を持った児童も一緒になって支援員が補助しながら授業を受ける光景があり、インクルーシブの観点からもしっかりと平等に学習できる環境が備わっていた。ここで補助する支援員の数は充実していた。

アメリカの教育カリキュラムは、州によって異なる。例えば、自分たちが訪れたロサンゼ

ルスの小学校では5年生までで、アイオワ州では日本と同様に6年生までという違いがみられ、それぞれの特色があった。また、各学校には廊下や階段の至るところに学年毎のルールが貼られ、根本的なところまで一貫した理由や意味について学ぶことができる。日本の教育では、単にルールは守るものであると教えられるが、なぜそうしなければならないのかが曖昧なままになるケースが多く、その点でアメリカのこのような型を学ぶことは大切であると考えた。また、アメリカの学校にもクラス目標はあり、各学級に応じて異なるが、共通して多様性を認め合うといった人種の違いを理解するようなものもみられた。アメリカならではの多国籍で多文化だからこそのルールである。ロサンゼルス Wishとアイオワの Alexander、Garner において面白い発見があり、各学校にはそれぞれ日本でいう校章のようなマークが存在し、動物やモノで表現されている。例えば、Garner では、ワニで表現されユニークさがあり、興味深かった。



英語という言語の壁

世界の共通言語である英語は、授業実践で英語は話すことはもちろんホームステイ先や、アイオワ大学の学生と話す時も英語でコミュニケーションを図ろうと意識した。しかし、語彙の知識が不足していたため深い会話まで話せず、表面上の会話が多くなってしまったことが非常に悔しかった。思いや伝えたいことはたくさんあるのにも関わらず、それを最大限伝えられないもどかしさを味わった。それでもアメリカの人たちは、話を聞いてくれたり、わかってくれたりしようとしてくれて温かさと優しさを肌で感じた。ホームステイ先では、色々なビーチや観光に連れてってもらった。最終日には親戚で集まりホームパーティをして音楽や歌を歌ったりする中で多くの人たちと繋がることができ、ここで音楽は国境を越えると実感した。一方で、今回英語が話せる人



に頼ったりしていたのが自分の中で改善すべき部分だったので、もっと積極的に話せばよかったですと反省している。これを機に中学の英語免許を取得する予定なので悔しさを糧にし、一から英語を学んでいきたいと決心した。

まとめ

アメリカは自由な国であるため教育もそれなりにゆると勝手に当初は思っていたが、実際には、しっかりと考えられたカリキュラムに沿った教育がなされ、様々な点においても日本とは全く異なり、見習う点がたくさんあった。しかし、観察での授業を見る限りの取り組みは日本より自由さがあり、児童は伸び伸びと好きな勉強スタイルで学習していたので個人的に非常によいと感じた。自由といってもそれなりに責任が問われしっかりと物事を判断する力は必要で、考える力はもっと重要であるとアメリカで学んだ。また、教師と児童の信頼関係も上手く絡み合い雰囲気よさが授業の中で滲み出ている。それでも各クラスは担任の教師によって当然色は異なり、子どもたちもまた教師によって影響される。これは、日本でも同様である。



海外教育研究を経て、日本とは違う側面からの教育の視野も広がり学びも多く嬉しさ、楽しさ、悔しさといった感情が入り混じり毎日が真新しく感じた。アメリカという異文化を知り、実際に行ってみてわかることや実際に授業を实践してみて気づくことを知り、やってみないと見えてこないことが実体験として経験できたのは、今の自分にとっての大きな成長とも言えるのでこれからの研究や新たに始まる活動、私生活にも役立てていきたいと考える。改めて海外の教育や学校の関心が深まり、将来の可能性が広がったアメリカでの2週間はとても濃密で充実した時間だった。

海外教育特別研究 B を終えて

言語系コース (英語) 1 年

森田 康哉

私がこの海外教育研究をとった理由は、大学在学中に一度は海外へ行き英語に触れたい、といういたって漠然としたものであった。私は1年だったため、教育に関する知識などが浅いのはもちろん、授業を行った経験もなかった。果たして実りある2週間になるのだろうかと心配だった。しかしアメリカの学校で実際に行われている授業を観察したり、自分たちが授業をしたりすることで、アメリカと日本の教育の違いであったり共通する点などを肌で感じる事ができて、とてもよい経験になったと考えている。

・ 現地の学校を訪れて感じたこと

実際に、私がこれから教育を学んでいく上で活かせることができるのではないかと感じたことは、まず放課後に先生方が集まり、一人ひとりその日のよかった点 (Success)、改善すべき点あるいはよくなかった点 (Challenge)、そしてチャレンジに対してこれからどうすべきか (Action) の3つを共有するディブリーフィング (Debriefing) と呼ばれる時間があるということである。しかも幸いなことに、我々がこのグループのプレゼンテーションがあった日の放課後、実際に先生の一員としてそのディブリーフィングに参加する機会を頂くことができた。そこでプレゼンテーションの振り返りや生徒とのコミュニケーションのとり方について振り返ることができた。

生徒たちがその日一日の出来事などを共有する活動として、私が以前通っていた小学校や中学校では、「帰りの学活」というものがあった。しかしそれは児童生徒が主体であり、一日を振り返るだけで、これからクラスや学校をよりよくするためにはどうすればよいかという Action のような意見や答えというものは出ていなかった。一方、今回訪れた学校では先生だけでそれが行われている。先生方自身がディブリーフィングでその日の出来事を共有し、他の先生から意見を取り入れることで、教師側からの学校生活の改善又は改良が期待できるのではないかと考えた。

また、健常な子ども、そしてその中でも特に優れて頭の良い子どもと障がいをもった子ども

もと同じ教室で同じ授業を受けるインテグレーション教育を採っていた。一見、統合されている教室となると、なかなか落ち着いてくれなかったり、叫んだりしてしまう障がいをもった子どもが一人でもいれば、やはり授業に集中できなくなってしまう子どももいるだろうし、先生が障がいをもった子どもへのサポートをしなければならなくなり、思うように授業が進まない場合も起こりうる。一方、障がいをもった子どもにとって、健常な子どもが受ける授業というのは難しいのではないかと考えられる。そのため統合をするべきか否かというのを決定するのは決して簡単なことではない。

しかし実際に統合された教室をのぞいてみると、健常な子どもと障がいをもった子どもとが問題なく学習していたように感じられた。むしろ、彼らが互いにコミュニケーションをとり合っている姿も見られた。これが統合教育なのだと改めて分かった。「健常な子どもは障がいをもった子どもから学び、障がいをもった子どもは健常な子どもから学ぶのだ。」とホームステイ先のホストファザーが言っていた。まさにその通りだと思った。

・プレゼンテーションに関して

私たちのグループのプレゼンテーションの内容は、書道を体験してもらおうというものだった。また、書いてもらう漢字は、「とめ・はね・はらい」に着目し「竹」を取り上げた。日々の授業で他のグループのメンバーや先生方からいただいたアドバイスのおかげでプレゼンテーションを改善・改良することができたのだと、現地で初めてプレゼンテーションをした時に痛感した。しかしその反面、実際に現地の中学生を相手にしてみても初めて改善点に気づけた部分もあった。

例えば、プレゼンテーションのところどころで発問してみたりすることで、子どもの参加意欲をなるべく低下させないようにした。一方的に教えているだけでは、相手もつまらなくなってしまうため、話を聴いてくれなくなってしまう。そして結果として、授業が思うように進まなくなってしまう。授業というものは、ただ先生が子どもに一方的に教えるのではなく、子どもとのコミュニケーションが前提にあるのではないかと感じた。

他にも、パワーポイントのスライドをもっと見やすいように工夫したりした。「とめ・はね・はらい」に加えて、竹の書き順を指導するのに動画を用いたが、はねができなかったり、

書き順通りに書いてくれなかったり、正直、「これだけ丁寧に動画も見せて書き順も確認したのに、なんでかけるようにならないの??」と思っていた。でもよく考えてみれば、アメリカの子どもたちにとって漢字なんか書いたこともないし、ましてや「竹」なんか見たこともないのだ。私たち日本人がアラビア語の字を見るのと同じように、彼らにとって、漢字はただの直線や曲線が集まったものでしかないと感じた。私たちのプレゼンテーションは、異文化を教える大変さを身に染みさせるものであった。

プレゼンテーション中に大変困ったことが1つある。それは、褒め言葉のレポーターが日本語でほめる際と比べ格段に少ないということだ。上手に書けたとき、いざ口を開くと「Good!」「Nice!」くらいしか出てこなかったのがとても悔しかった。具体的に何が Goodなのか詳しく褒めてあげたいのにそれができないという何とももどかしい気持ちがあったのを覚えている。同時に、もっと英語を勉強しておけば…と後悔した。

私たちのプレゼンテーションが何事もなく円滑に進んだのは、私たちのために教室を貸してくださった現地の先生方のサポートがあったからである。いつも自分は誰かに支えられて生きているのだと改めて実感することができた。この2週間で味わった嬉しさや楽しさ、悔しさや悲しさが今後の自分の力になってくれると信じている。

海外教育研究 B をふりかえって

学部 2 年自然系理科コース

松島理恵

・ふりかえり

1. アメリカと日本の教育の比較（共通点、相違点など）

私は、アメリカに渡航する前から大学の授業の中で、アメリカと日本の教育の比較について少しだけ学習してきた。それもあり、アメリカと日本の教育の違いを実際にこの目で見る事ができると、とても関心が高まっていた。だが、私が学んでいた以上にその違いは多くあり、大きな衝撃を受けることとなった。

もちろん、相違する点だけではなく、共通点も何点かみられた。例えば、アメリカの方が先に重点を置いたのだが、子どもに対する理科教育（Science Education）に力を注いでいたことである。日本でも、子どもの理科離れをどうにかしようと学校の中や外部でも様々なイベントなどが行われている。これはアメリカでも同じで、私たちが授業実践を行わせて頂いた WISH では小学校では選択制で、中学校では必修として理科のプロジェクトに参加しなくてはならないという決まりがあった。Science に加え、5 Core subjects として、Music、Technology、Engineering、Art といった領域にも特別に力を注いでいた。これらの領域に対する力の入れ方はすごく、Music だったらロサンゼルスといったこともありハリウッド関係の人が来て一緒に作曲活動を行ったり、Technology では情報系の会社の人たちにも学校をバックアップしてもらい、子どもたちが 1 人 1 台のコンピューターを持って授業を受けているそうだ。この辺りに関しては、日本と力の入れ方の度合いが異なるなと感じた。

そして相違点として特に驚いたのは、障害を持った子どもたちも普通教室の中でみんなと一緒に学習していた点である。日本であつたら、通常の子どもたちが学習するのは普通学級、障害を持った子どもたちが学習する場は特別支援学級と分けられている。だが、アメリカでは極力、普通学級の中で担任の教員から学び、普通学級の中で学ぶことに困難が生じた時に別の場所で学ぶといった体制を取っていた。これは日本の統合化とは明らかに違う。どんな子どもにも等しく教育を受ける義務というのは存在しているので、一緒にできること

はみんなと区別されることなく行い、それが難しくなった時に専門のアシスタントからの支援を受けるのだ。また、どの教科の授業においても子どもたちが主体的になり、話し合いなどで考えを出すことにより授業が進められていた。日本でよくみられるような、教師が一方的に子どもに知識を教え込むといったような授業は行われていなかった。日本の学校では、多くの人が集まる場でなかなか自分の意見を言わない子どもが多い。だが、アメリカではその逆で教師が何か言うとすぐに子どもたちの手が挙がり、自分の意見をみんなに伝えようとする様子が多く見られた。なので、教師も自然と子どもたちの意見を尊重した授業を行い、教師か子どものどちらか一方だけが授業を作ってもダメであり、両方がきちんと存在していないと成り立たない意味のある授業がそこにはあった。お互いの存在を大切にした授業が成り立っているのは、教室の環境にもあったかもしれない。アメリカの中学校では、教師が1人ひとり自分の教室を持ち、子どもたちが授業ごとにそこへ移動して来て授業が展開されている。なので、教師は自分の好きなように教室をアレンジすることができる。それらは、日本のように子どもたちの人数分のイスと机が規則的に並べられただけの殺風景なものではなく、以下の写真（Northwest Junior High Schoolでの国語の授業教室）に示すように独創性に溢れ、子どもたちが教師に興味を抱いてくれるようにと考えられた教室になっていた。この国語の授業教室では、普通の電気ではなく間接照明で子どもたちが授業に集中しやすい明るさを保ち、また、リラックスして授業を受けることができるように椅子の他に柔らかいソファなどが置いてあった。このような教師の配慮も、日本ではあまりみられないものであると思う。



2. Teaching Practice に対するふりかえり（教育者として成長したこと、教育者として見えてきた今後の課題など）

今までに模擬授業などで人前で授業を行ったことはあったが、もちろん英語で授業を行ったことは今回が初めてであった。

まず、成長したこととしては、今回の全く日本語が通じない状況下において英語のみで授業を行うといった経験を通じて、ある程度の度胸がついたことだ。大学で行っている模擬授業などでは、緊張して相手の目を見ることができなくなってしまうこともあった。だが、アメリカの学校で、子どもたちに精一杯学んで欲しいことを英語で伝えようとしたこと、何とかして子どもたちとより良いコミュニケーションを取ろうとしたことで、多少のハプニングには動じない度胸がついたと思う。また、どうしたら子どもたちに、より伝えたいことが伝わりやすくなるのかということも以前より考えるようになった。こちら側がこれで伝わるであろうと思い準備していても、実際には子どもたちにはきちんと伝わっていなかったといったことがアメリカでの Teaching Practice の際にもあった。そこから、子どもたちの状況などを考慮して伝え方を変えていったりしたので、こちら側の考えだけでなく、常に子どもたちのことを考えて授業を作っていくことがいかに重要であるかを学んだ。このことは、今後授業を作っていく中でももちろん大切になってくるので、これに気付けたことは私自身にとってとても大きな成長となったと思う。

そして、教育者として見えてきた今後の課題は、狭い視野で授業を行うのではなく、常に広い視野を持つことを大切にしながら授業を行わなければならないといったことだ。今回の Teaching Practice では、1人の子どもに話しかけられた時に、その子どもとコミュニケーションを取ることに集中し過ぎてしまい、授業の進行が滞ってしまったことがあった。基本、授業では教師は1人しかいないので特定の子どもにばかり注意を払ってしまえば、当然のことながら授業は進行しないし、多くの子どもたちの様子を見ることができない。なので、今回の経験を踏まえて今後の教育実習などでは、全体の状況を把握しながら、できるだけ広い視野で子どもたちに授業を行っていきたいと思う。

H30 年度海外教育研究 B 活動報告

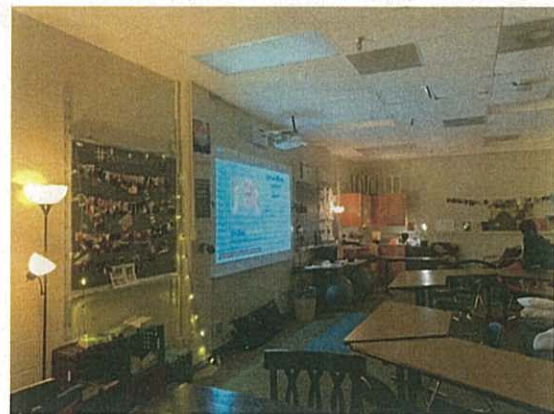
～中学校での授業実践から見たこと～

教科・領域教育専攻 言語系教育実践コース (英語)

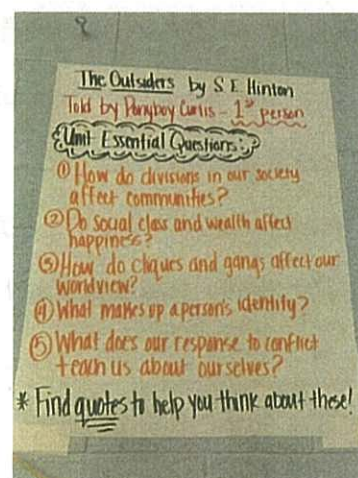
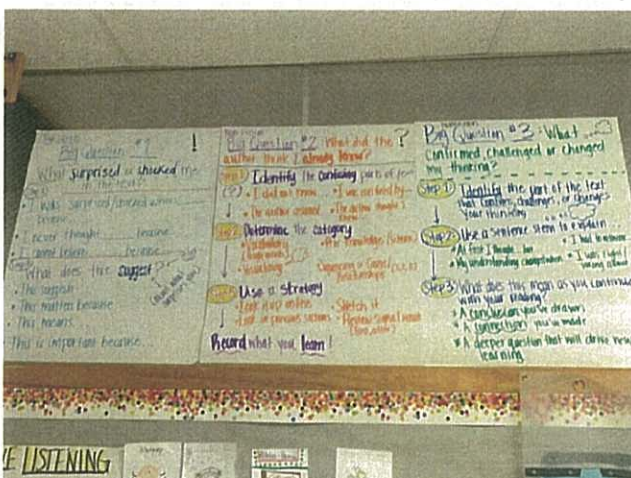
M1 宮島 淳人 (みやじま あつひと)

★アメリカの教育現場

今回の海外研修は私にとって初めての海外渡航であり、海外で生活するだけでなく、海外の教育現場を実際に訪問することができるのはとても貴重な体験でした。始めは、文化の違いに圧倒されてしまいましたが、充実した学校訪問を行うことができました。



実際に中学校を訪問すると、教師が子どもたちのいる教室に行くのではなく、授業毎に、子どもたちが教室にやってくることで。そのため、教師は授業スタイルに合わせて教室環境を自由に変えていました。例えば、Iowa の Southeast Junior High School における literacy の時間では、以下のような掲示物を使用していました。



現地の先生はこれらの掲示物で、子どもたちがどのように本を読むべきなのか、授業内外を問わず、確認できるようにしていると言っていました。このような学習を補助するための掲示物や ICT 教材の工夫がどの教室でも確認することができました。このような指導の工夫から、アメリカでの教育に対する強い熱意を感じました。日本の中学校では、教師が教室を訪れるため、教科それぞれの特色を生かした教室環境の調節はなかなか行うことはできません。しかし、学習の質を高めるために、学習を補助する手立てを充実することは必要不可欠であると感じました。ぜひ私が教師になった時に、子どもたちの学習の困難を取り除くために、積極的に掲示物や ICT 教材を活用していこうと決心しました。日本の教室環境では一人の教師ができることは限られてしまいます。私個人でできる範囲で少しずつ、学習のサポートの仕方を検討していきたいと思います。

★授業実践を通して成長できたこと



私たちの授業のテーマは「書道」でした。子どもたちが書道における正しい姿勢、筆の持ち方、「とめ・はね・はらい」のような筆の動かし方を意識し、「竹」という漢字を正しい筆順で書くことができることが授業の目標として設定しました。WISH Carter School で 3 回、Northwest Junior High School で 6 回、Southeast Junior High School では 7 回、計 16 回の授業実践を行いました。

計 16 回の授業実践を通して、私たちが成長を実感できた点は 2 点あります。

1 つ目は、英語での授業実践力が身についたことです。現地での授業実践を繰り返すうちに、単調に英語を話すのではなく、子どもたちの注意を引き付けるために、適切な間を空け、重要な箇所に抑揚をつけて、指示することが徐々にできるようになりました。始めは、英語を話すことに慣れていなかったため、事前に用意していたスクリプトを話すだけ

で精一杯でした。10月から授業の内容構成・スライドづくり・子どもたちへの問いかけについて、グループ内で何度も議論し、模擬授業を行ってきた成果が授業実践に表れていたと感じました。

2つ目は、協同的に問題解決する力が身についたことです。実際に中学校を訪問した際に、自分たちが想定していた状況と異なる場面に遭遇することがありました。例えば、教室環境の調整、活動で使用する書道道具の不足、授業の終末部におけるまとめ方、子どもたちへの指示等について、早急に対応しなければなりませんでしたが、私たちは互いに協力し合い、問題解決のための手段を模索し、協力して課題を察生することができました。これはグループメンバー全員が、自分のグループ内におけるそれぞれの役割を自覚し、授業実践の成功のための的確な判断をした結果だと考えられます。

初めての海外生活を通して非常に貴重な体験は私の教職への熱意をさらに高めてくれました。この経験を活かし、私は子どもたちに実際の海外生活や学校について伝え、より英語への魅力を伝えることができるように、日々精進していきたいと思えます。

全員が無事に帰国しました！

心理臨床コース 五十嵐 透子

参加学生 1 人ひとりの体験に加え、本プログラム全体の流れを記していきたいと思えます。

2018 年 4 月に参加学生の募集を開始し、当初は 14 名の学部・大学院の学生が履修登録を行いましたが、アメリカでの教育実践は 11 名になりました。参加学生 1 人ひとりが希望する校種と学年によるグループ分けで 4 つとなり、7 月からさまざまな活動が始まりました。

各グループのテーマは Table 2 に載せましたが、グループ#1 は幼稚園から小学校 2 年生 (K-2) の低学年を対象にお正月の“福笑い”から“笑い”の効果をアメリカの子どもたちに学んでもらうことにしました。グループ#2 は小学校中学年を対象に“ソーラン節”の起源や 1 つひとつの動作の意味、多くのニシン漁の漁師たちのハーモラスな動きにつながることやその重要性などへの理解と抽出した 2 つの動きを中心とした踊り、グループ#3 は小学校高学年を対象に日本の食行動である“音を立てて食する”目的を理解し、抹茶を“吸い切る”体験を、そしてグループ#4 は中学生を対象に“とめ／はね／はらい”の書道の基本となる 3 つの書き方とそれぞれの目的、それらを行うために必要となることをテーマに選択し、英語での教育実践の準備に 8 か月を費やしました。なかなかテーマが決まらず、多くのことを含めてしまったり、1 つのことに焦点を充てることに難しさを体験し、何をアメリカの子どもたちに学んで欲しいのかの問いかけが続きました。英語のクリプトとパワーポイントは何度も何度も修正が行われました。教材の準備にも、何度も修正を加え、長い時間をかけました。

3 月 3 日 (日曜日) の羽田空港には、全員が揃い、同伴教員のわたくしたちがこれからの 2 週間を話し合っていて最後に飛行機に飛び乗りました。最初の目的地である Los Angeles では、充実した統合化教育の実践校である WISH Charter School で教育実践を行いました。1 日目はガイダンスと小中学校だけでなく昨年開校した高等学校も訪問し、発達段階に合わせた教育実践を観察し、2 日目に行う教育実践の受け入れ学年教員との調整などを行いました。日本国内との類似点と相違点を目の当たりにするなかで、書籍を読む課題でも、1 人ひとりの児童が自分が読みやすい状態で読書をする＝ある児童は自分の机に座って、ある児童は床に寝そべって、ある児童は教室内のソファで、と児童 1 人ひとりのスタイルが尊重されているという場面に直面し、国内での教室のなかで全員が同じ形で読書を行う状態とまったく異なってもいいんだ！という、ある意味でショッキングな時間をもちました。そして、個別性に合わせた教育を考える機会にもなりました。

アメリカで初めて教育実践を行った訪問 2 日目には、15:00 過ぎから教員たちが毎日行っている de-briefing にも参加し、学生 1 人ひとりの体験を共有しました。児童生徒の情報共有も

行われますが、WISH Charter School では「ACS : action-challenge-success」の視点で、反省会ではなく今日の教育実践のふり返り、翌日の教育実践にポジティブな面を活かすことを共有したり、教員が互いにサポートし合う時間でした。

協定校のアイオワ大学のある Iowa City では、小中学校 4 校での教育実践に加え、3 月 11 日の初日にはアイオワ大学教育学部で本プログラムの受け入れ担当先である Teacher Leader Center (TLC) で、学部長の Dr. Dan Clay、Dr. Nancu Langguth (副学部長)、Dr. Greg Hamot (協定校コーディネーター)、TLC ディレクターの Mr. Will Coghill-Behrends、そして教育学部の大学院生たちも加わった歓迎会がありました。参加学生 1 人ひとりが英語で自己紹介をして、学生間交流が促進され、関心のある中等教育の実習関連講義にも出席することにつながりました。教育学部では、「教室内での IT 教育」と「社会情動知能教育」に関する特別講義に加え、さまざまな障害をもつ人たちが大学生活を送りそのなかで社会生活や就労への教育や研修を受ける「REACH program (Realizing and Educational and Career Hopes)」で学生 4 人も加わり、インタラクティブな時間を過ごしました。

Iowa City を離れる前日は、現在でも電気も自動車も使わない移民当時の伝統的な生活を送っているアーミッシュ (Amish) の人たちが住む Kalona で文化研修を行いました。本プログラムのために、アーミッシュの学校訪問も含んだ内容に Mr. Coghill-Behrends がアレンジをしてくれていました。最初に、Mr. Floyd Yutzy から、アーミッシュとメノナイト (Mennonite) の歴史や宗教、移民の歴史、そして現在の生活に関する講義を受け、多くの質問で時間が足りないくらいでした。Kalona Historical Village Welcome Center を離れ、最初に 300 頭あまりを所有している山羊農家を訪問しました。今朝生まれたばかりの山羊に触れ、2 つ目の Stringtown Buggy Shop では、アーミッシュの人たちが使用しているバギー (馬車) のオーダーから製造過程を知りました。昼食はメノナイトのある家庭のダイニング・ルームでいただきました。ご主人が他界された後、子どもたちを育てるために 40 年以上にわたり 7 万人以上に食事を提供している 84 歳の女性の手料理に全員がころもからだも笑顔になりました。給仕をしてくれた 2 人のお孫さんをはじめ、小学校から高校までの 4 人のお孫さんたちは家庭で学習を行うホーム・スクールをされていました。1970 年代に始まり、1993 年に 50 州すべてで認められたオルタナティブ教育の 1 つで、国内にはない学習形態を直接知る機会にもなりました。

その後は、小学校 1 年生から 8 年生までの 20 人余りの子どもたちが、非常に静かな学習環境で 20 代の Amish の男性と女性から学びのサポートを受けている New Order Amish School House を訪問しました。学校といっても 1 室だけの「house」の単語が用いられているのも理解でき、これまでの経験やイメージとも大きく異なる教育環境を直接体験しました。子どもたち全員がドイツ語の歌を歌ってくれ、お礼に「ふるさと」と「ひなまつり」の 2 曲を歌いました。Mr. Yutzy からのアーミッシュの人々の“現在”の生活に直接触れる時間で、将来の教育者たちはこの学習環境のなかで、さまざまな思いと感情を抱いていると思います。

Table 2 に挙げたように、4 グループ全体でそれぞれが目的とした日本文化に関し、国内での教育実践以上の実施開封の機会を得て、アメリカ人の 1,034 名の児童生徒が直接学ぶ機会になりました。そして、数えきれないさまざまな体験は、参加学生が教員になった時に【生きた言葉】として目の前の児童生徒たちに伝えられることと思います。

アメリカの子どもたちへの教育実践だけでなく、充実した学び多き 2 週間を送るにあたり、WISH Charter School の Dr. Shawna Draxon と Mr. Rome Sottelo、アイオワ大学の Mr. Will Coghill-Behrends に、そして各学校で受け入れてくださった学校長をはじめ教員の方々のサポートなしには実現できませんでした。深く感謝しています。そして、事前の英語指導を担当してくださった藤谷 元子准教授と国際交流チームの渡邊 一美副課長、太田美里さん、福井陽子さんの絶え間ない対応になしには実現したかったことを申し添えたいと思います。ありがとうございました。

Table 1 海外教育特別研究 B2019 年度の教育実践実施校

	実施校	所在市／州
1	WISH Charter elementary school	Los Angeles, California
2	WISH Charter middle school	Los Angeles
3	Archibald Alexander elementary school	Iowa City, Iowa
4	Buford Garner elementary school	North Liberty, Iowa
5	Northwest junior highs school	Coralville, Iowa
6	Southeast junior highs school	Iowa City, Iowa

Table 2 海外教育特別研究 B2019 年度のプレゼンテーション回数と対象児童生徒数

グループ	対象校種・学年	テーマ	学年ごとの実施回数	実施総数 (回)	対象児童生徒数 (名)	合計 (名)
1	K-2 年生	福笑い	K= 4 回 ; 1=1 回 ; 2=5 回	10	192	
2	3/4 年生	ソーラン節	3= 4 回 ; 4=6 回	10	229	
3	5/6 年生	すする行為	5=9 回 ; 6=1 回	10	219	
4	7/8 年生	書道		16	394	1,034

注：K=kindergarten

一連のプログラムを終えて

松尾大介

今回、本プログラムを支援する教員として初めて参加しました。まずは、昨年の6月から始まった事前準備やアメリカでの授業実践など、学生の懸命な取り組みを大いに評価したいと思います。何度も練り直した授業計画、教材の準備や練習、そして異国での実践…私は、学生たちと共にしながら、改めて海外での授業を行うために必要な努力とその努力から得られる意義について、実感することができました。思い返せば、学生の皆さんにとっては、苦労やトラブルも多かったかもしれませんが、この経験が今後の教育実習や教育の現場に立つとき、皆さんの背中を押してくれる大きな力になるはずです。各班の授業実践について、私の感想を以下に記します。

1 班は「福笑い」を題材とした授業でした。低学年の子どもたちを対象とする活動ですから、実践では想定していたようには進まず、学生は困惑して始まりました。しかし、個々の子どもたちに積極的に寄り添っていくことで、次第に子供たちはとても楽しそうに活動できるようになりました。「福笑い」の台紙や部品などの教材の準備は、とても大変そうでしたが、ともに向き合っただけで触れ合える「福笑い」という教材の特徴こそが、子どもたちと寄り添える場を形づくったように感じました。

2 班は「ソーラン節」をテーマに日本の文化を伝えました。事前準備の途中で班の1名が参加できなくなり、学部生2名のみで実施することになりましたが、現地の校長先生からも評価されたように、体全体の実感から日本の風土に触れられる充実した授業でした。踊りのリズムに合わせて、学生と子どもたちが一体となっていく様子に感動しました。

3 班は、日本の食における「すすり音」に着目して授業をつくりました。実際の授業では、用意していた重要な音声音がPCから流れないアクシデントなどもあり、四苦八苦していましたが、班で協力して臨機応変に対応していこうとしていました。授業では特に抹茶について関心が高いらしく、実際に体験する場面では、子どもたちだけでなく、担任の先生も一緒に抹茶を勢いよくすすっている様子が印象的でした。

4 班は、中学校で書道の授業を合計 16 回も実践しました。書道は、環境や教材の整備も大変なため、海外の学校で実施すれば、墨や筆の素材体験で終わってしまう恐れがありました。しかし、4 班は押さえるべき要点を的確に伝える手だてを準備し、実際の授業でも班で改善点を確認しながら実践を重ねていました。そして、生徒たちの書き上げた「竹」は驚くほど、のびやかで、力強いものでした。アートという観点からも評価できる作品ができたと思います。

以上のような学生たちの実践をともにし、私は初めて訪れたアメリカにもかかわらず、生き生きとした子どもたちの自然な姿に接することができ、日本の子どもたちのことも改めて見つめなおしました。

アメリカ滞在の最終日、文明から離れて生活しているアーミッシュの人々の暮らす地を訪ねたことも、私にとって考えさせられる貴重な機会となりました。そこで、私はアーミッシュキルトに彩られた星の模様の意味について尋ねました。「主題のような意味はなく、生活で女性が花を飾り、歌うような自然な営み」であるという答えに、人間として生きるための根源的表現をまのあたりに見る思いがしました。

最後に、本プログラムが充実した活動となったのは、五十嵐先生、藤谷先生のご尽力、国際交流推進センターの渡辺様、太田様、福井様のご支援、そして、アイオワ大学、ロサンゼルスとアイオワにおけるホスト校の先生方やスタッフの皆様から多大なるご協力を賜ったおかげであり、厚く御礼を申し上げます。

